令和２年度　初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会

分科会　（合同分科会）　第３回　　議事録

日時	令和 3 年 1 月 19 日（火）17：00～19：00
場所	Zoom 会議室
委員	（委員） 内川　健　　成蹊小学校　教諭 大日方　樹　　岩倉高等学校　教諭 大屋　泰彦　　沖縄水産高等学校　教諭 河合　豊明　　品川女子学院　教諭 北村　由美　　金沢商業高等学校　教諭 宍戸　学　　日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授【統括座長】 鈴鹿　剛　　徳島県立徳島商業高等学校　教諭 高嶋　竜平　　法政大学国際高等学校　教諭 高清水　英俊　　宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会 手塚　美和　　静岡県静岡市立清水有度第二小学校 教諭 寺本　潔　　玉川大学 教育学部 教育学科　教授 中村　太悟　　学校法人希望が丘学園　鳳凰高等学校　教諭 村上　和夫　　立教大学　名誉教授 （オブザーバー） 中谷 知記　　北海道ニセコ高等学校　教諭 （事務局） 吉田 瑛仁　　観光庁　参事官（観光人材政策）付　課長補佐 刀根　明日香　　観光庁　参事官（観光人材政策）付　主査 西川　宏和　　観光庁　参事官（観光人材政策）付　係員 小森　清志　　三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社 田中　三文　　三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社 平川　彰吾　　三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社 吉田　夏稀　　三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社 （氏名五十音順・敬称略）

1．開会･観光庁挨拶

○事務局・MURC 小森

第３回分科会（合同分科会）を開催させていただきます。

開会に先立ちまして、観光庁様、ご挨拶をお願いします。

○観光庁・吉田

本日は貴重な時間をいただきまして、ありがとうございます。これまでの分科会、座長ミーテ

ィング等の議論を拝聴させていただいておりまして、ここまでの議論の中で観光教育の中で、みなさまが取組まれてきた取組み、課題を参考にしております。その中で資質、能力の部分について観光庁がひとつ重要なファクターであると認識しております。資質や能力という表現が正しいかどうかについてはもう少し議論が必要だと思っていますが、これらを軸にしながら観光教育の価値、意義を確認しながら求められるプログラムに反映させていきたいと思っております。いずれにせよ、観光教育は実際にしてみないとわからないということが先生方の実感であると認識しておりますので、来年度、先生方や子どもが第一歩を踏み出す際にできるだけハードルを低くしていくことができるような、観光教育のプログラムの作成や勉強会を実施していきたいと考えております。

本日は最終の分科会となりますが、今後とも観光庁に広くご意見をいただければ幸いでございます。本日は短い時間ではございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

〇観光庁・刀根

私からは、観光庁でまとめました資質・能力について説明させていただきます。

今までの議論をもとに資質・能力の部分を抽出しました。小中に関しては、「観光の意義について理解を深め、日本及び地域の愛着と誇りを持つ」と「地域の魅力を価値に変える」とおいております。大切なのは、観光の意義と地域の魅力を価値に変えるという部分だと考えております。

「観光の意義」の主な意見としましては、教育界で観光産業を適切に理解されていないこと、他地域と比較した際に同じ観光業でも違う仕事、役割があるのではないか。それを子どもたちが学ぶことで地域の独自性を見出し、町に対する自己肯定感につながるのではないかという意見がありました。

「地域の魅力を価値に変える」点に関しては、ふるさと教育やふるさと理解で終わらせることなく、発信したり他地域と比較したりすることで外に目を向けることが必要という意見があり、この二つを挙げております。

高校普通科に関しては「旅行に関わる価値観、美意識、教養を高める」、「観光に関する気付く力、問いを立てる力、解決する力を高める」とおいております。

まず「価値観、美意識、教養」に関しましては、芸術や文化が受験科目ではないためないがしろにされてきた観光教育がこれらを示すことができないか、高校教育において人生を豊かにする、何が楽しく生きていくことか、そういった観点がなかなか持ちづらかったので、観光教育を通じて、将来の楽しみや仕事と余暇のバランスなどの視点を養いたいという意見がありました。

「気付く力、問いを立てる力、解決する力」に関しては、やはり問いを立てる力が短期学習では難しいとの意見がありました。主体性は文科省が定めているとても大切な要素ですが、主体性は自分で仮説を立てて繰り返し検証することで身に着けるものであり、観光は、その題材として取組みやすいのではないかという意見がございましたので、この二つを挙げております。

最後に高校の専門学科に関しまして「観光の価値と方法の基礎能力（人々の交流を促進し、地域の魅力を価値に変える理念や方法など)」、そして「プロデュース力、俯瞰力」を挙げております。

「観光の価値と方法の基礎能力」に関しましては、基礎能力は知識面、活動面の両方をしっかりサポートする必要があるという意見で着目しました。

「プロデュース力」は、取材力や企画力、課題発見能力などの総合力を身に着けることができ

るのは、観光教育の醍醐味だという意見がありましたので、この二つを入れております。

これらは観光庁でまとめたものでございますが、今日の意見を通じて小中高の縦の連携、これも入れた方が良いという意見を広くいただけるのを楽しみにしております。

2. 各座長による、挨拶・各分科会の意見紹介

〇玉川大学・寺本委員

小学校と中学校の校種の違いはまだまだ歴然とありまして、小学校では学びに主体性、楽しくないと子どもたちは学んでくれません。そういった意味では観光という題材は、主体性を育む題材でもあります。今はコロナでできませんが、グループワーク、フィールドワーク、地域に出かけて行ってさまざまな学習をやる。その意義、効果は抜群であるという話が、いろいろな取組みから出てきました。宮城県の教育委員会の先生や静岡の現場の先生、東京都内の先生からも具体的な意見が出ました。

中学、高校、特に中学校はやることが多くて問題がありますが、とりわけ中学校は教科の中身にある程度入れてほしいですし、総合的な学習の時間の中で観光題材をどう取り扱うのか、さらにキャリア教育において、将来の進路、担い手育成につながるような中学校らしい教育が必要だとずいぶん論じられたかと思います。

修学旅行も話題に入ってまいりました。中学校の修学旅行は全体で訪問するだけではなく、個別分散行動が１日あるいは半日くらい入っており、そこの中で具体的に観光地にて何らかのアクション、フィールドワークもできます。最近は中学校くらいから SDGs に興味を持った中学生が、修学旅行でも探究している事例が出始めており、そこに持続可能な観光はどうあるべきかという問題解決学習、課題解決の力をうまく入れ込んでいくと、観光教育の小中の系統的な立ち上げが実現できる可能性があるということが話題に出てきました。

〇立教大学・村上委員

高校普通科はカバーする範囲が非常に広くて、生徒たちも多様な目的をもって学ぶという状態です。そのうち多くは、半数が大学進学、半数が専門学校などを経由して社会に出るという状況です。高校普通科は入った時はバラバラですが、地理で観光を教えられるほか、社会との関係の中で自分が観光の事象を通じて何を学ぶのかというところをはっきりさせることができます。そこで自分が持った問題点を例えば高等教育につなげていったり、社会での自分の働き方につなげていったりすることが必要だということになりました。

同時に、高校になりますと教えている内容のレベルも上がり、大学の教養と同じくらいに上がってきますので、高校生に観光のどういうことを学ばせるのかと考えると、なかなか難しいことを学ぶことになります。その時に自分がどういう問題意識を持ち、旅行をどうとらえて、どうやって旅行の計画を作っていくのか、旅行あるいは観光そのものに対する自分のとらえ方をどうやって育成するのかが、大きな課題になってまいります。

小学校や中学校ではもちろん、地域の中あるいは地域の魅力の発信、見つけ方が重要ですが、高校になると自分で旅行することを通じて、自分との関わりの中にどうやって置くのかが重要になってまいります。そこで、私どもとしましては社会の代表として企業の代表として、協議会の委員でいらっしゃいます JTB の中野教育ソリューションセンター長にお見えいただきまして、実

際に旅行産業から見た高等学校の普通科の観光教育は何が課題なのかをお聞きしました。また、京都の京都外国語大学で哲学を教えていらっしゃる原先生からは、大学として高校生を受入れていく時に高等教育をしている方々に何が課題かをお聞きしました。

そうすると、やはり学校で教えようとしていることと社会で学ばせようとしていることにギャップがあることが分かりました。例えばJTBの中野さんのお話ですと、JTBが経産省と共同している新しい教室のプログラムでやっているような、ビッグデータを使いながら地域と観光を作り上げるプロジェクトに生徒が積極的に取組んでいる一方で、生徒は修学旅行に前向きかというとそうではないという現状に課題があるのではないかという話が出てまいりました。

同時に大学で観光を教えている教員からは、高校生の学び方が大学と合っていないので大学に入ってからすごく苦労するという現状を耳にします。特に気づく力、問いを立てる力に大きな課題があるそうです。そこを高校でどう大学と接合するのかが課題である、というところで話がまとまりました。

〇日本大学・宍戸委員

高校の専門学科の分科会を2回行いました。１回目は、参加者の皆さんがどのようなことをされているのか（皆さん高校の研究会で20年以上活動していますので、知っていることもありますが）を確認しながら、実際に取組んでこられた観光教育の話をしていただきました。

その中で、資質・能力、意義、時代感なども検討してきました。我々が1回目に強く意識したのは、2022年度新学習指導要領で商業科の中に観光ビジネスの科目ができることで、高等学校における観光教育への期待も大きいと認識しています。一方で、高校にすでに作られている研究会では普通科にいる高島先生のような社会科の先生や、今回参加していただいているように水産科の先生もいらっしゃいます。商業高校の先生は比較的ネットワークも広いので、お話を伺うと福祉科の先生との交流を持っている事例がありました。専門学科で観光教育を議論する際に、商業のカリキュラムだけはなく、もう少し幅広く考えようという意見が出てきました。

２回目は、１回目の議論を踏まえて出てきたものをベースに小中、普通科、それと比べて専門学科の観光教育はどこに特色があるのかを話しました。専門学科の教員としては、もともと専門科目が多くあり、それぞれ授業運営をしていますので、その枠組み自体はあまり疑うところはありませんが、実際に教える教員の研修、具体的に教える段階での悩みがあることが挙がりました。

商業高校の場合は進学する生徒もいますが就職する生徒も多くて、大学ほどではないにしても地域連携などについては、かなり取り組んでいる子どもが多くいます。そのような意味で、実務的な能力や先ほど出てきたプロデュース力、社会に役立つスキルについて、観光を通じて磨き、観光ビジネスや観光の取組みに貢献してくれるような人材を育てたいという意見がありました。

一方で大きな商業高校には観光コースがあり、反対に観光に関する科目を取っていない生徒も少なからずいるため、その中でどのような位置づけが必要かという話も出てきました。その先生方のお話を紐解くと、商業は簿記や情報処理の授業が中心で、そちらの検定教育と比べると観光教育は実態がないところがあるということです。一方でコミュニケーション能力や積極性、協働力が強くて、たくましさがあるのではないかということに観光教育の意義があると指摘されました。

先ほど観光庁からのご指摘があったように小中高それぞれの教育があるということではなく、連続していくことが重要です。また、例えば高校のオープンキャンパスに中学生が来て教えるな

ど、中学校と高校の縦のつながりが今後、もっと出てくると良いという話が出てきました。

3. 事務局 実施内容の説明

○事務局・MURC 平川
資料２を説明

4. 意見交換

① グループ討議１「発達段階別の取組みイメージ」

【ブレイクアウトルーム①】

○玉川大学・寺本委員

今日もお集まりいただきありがとうございます。刀根さんにも入っていただき、良かったです。

これまで、日本では新しい○○教育がとても多いのですが、例えば環境教育は比較的根付いていて、特に小中ではリサイクル、自然保護活動、ESD、SDGs に移行して、熱心な先生方や学会、団体になっています。そのような中で、今日論じたいのは発達段階別の取組みイメージと取組みの促進策についてです。

では内川先生から始めて、鹿児島の中村先生、沖縄水産の大屋先生、刀根さんにもご意見をいただき、事務局からも意見を聞きたいと思います。論点①について、具体的にどう進めるのかを考え始めた方が良いですから、先ほどの観光庁さんからの整理もよくできているけれど、みなさんどう思われますか。

○成蹊小学校・内川委員

とても分かりやすくて良いのではないかと思って見ていました。しかし、一つひとつの言葉の定義が必要なのではないかと思います。例えば「観光の意義について理解を深める」は、その意義は何だろうと考える必要があります。言葉をまとめたがゆえに、言葉の定義が必要なのかなと思います。「観光の意義について理解を深め」の「意義」は何か、「日本及び地域の愛着と誇りを持つ」の「地域」が具体的でない（「ふるさと」が決してそれが良いとは思わないですが、地域というのが言葉としてあいまい)、「日本」と「地域」が並列になるのかなど、精査する必要を感じます。

中学校では外国、世界のことを学習しますので、「日本及び地域」の地域に外国が含まれていないのは大丈夫なのかと感じました。「地域の魅力を価値に変える」は、とても良いと思いました。このまま、この言葉を使っていただきたいなと思います。はっきりした言葉の方がわかりやすいと思います。

取組みのイメージとして、他のものと比べるのであれば、他地域の活動や事象と比べるという意味での「他地域」は、「外国」など他のものという言葉が入っていると、より分かりやすいのかなと思っています。

高校の普通科に関しては、旅行と観光を使い分けており、その使い分けがはっきりしているのか気になりました。観光に気付く力は、先ほどの話を聞いているとわかるのですが、漠然としています。

最後に小学校は自分との関わりの中から学習課題を創出していて、テーマについて観光が存在すると思います。高校にいくと身近なテーマではありますが、おそらく地域というよりは個人、先ほどおっしゃっていた自分事、自分の将来のためという側面が強くなるため、小中と高校の関連性が言葉としてもうちょっとわかりやすくした方が良いと思います。小中と比べると、地域からいきなり個人に目的が変わっているので、そのあたりをつなぐ言葉が必要だと思います。

〇希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

内川先生の話に共感するところがあります。やはり言葉の定義が重要だと思います。観光という言葉自体も、各学校の先生、子どもたち、地域の人、それぞれによって価値観が違うので、どういうことが観光なのか、言葉の定義をしっかり立てることが、非常に重要だと思いました。

高校普通科の２番目の「観光に関する気付く力、問を立てる力、解決する力を高める」は、観光を通じて、自分が何を面白いと感じるのか、自分はどうやって生きていくのかに気付くところではないかと思います。「関する」ではなく、「通して」が適切ではないかというのが私の印象でした。高校普通科と小中間に飛躍があるのは私も感じていて、やはりつながりがあると分かりやすいと思いました。

普通科の方は、「旅行に関わる価値観」にあるように、自己について考え、自分がどう生きるか、どう学ぶかなどの、自分に向ける部分も重要であると同時に、小中でやってきた「地域とのつながり」をどう担っていくのかという視点も重要なのかと思います。それがやはり２番目の「観光に関する気付く力、問を立てる力、解決する力を高める」につながります。その力を高めた後、それをどこで発揮するのか、それは社会であり、社会での役割をどう還元するのか、地域から学んで、自分に落とし込んで次は社会に還元するという相互作用を意識していけると良いのかと私は思いました。

〇沖縄水産高等学校・大屋委員

大変難しいところではありますが、高校専門学科のところでは、「観光の価値と方法の基礎能力」として、まさに専門高校に求められる学校教育まで発展した視野を持った教育者の育成が必要です。子どもたちにもそういった能力を植え付けていく機会になるととらえております。連携という意味では、小中で探究学習が始まっており、それに絡めながら高校での取組みがあれば良いのかなと感じております。

最終的にはキーワードとして、人材育成につながるのではないでしょうか。プロデュース力を身に着けた人材、広い視野を持ち理解できる人材、観光の考え方を持った人材を育成していこうというのが、最終的な目標なのかなと考えていました。

小中、高校普通科でどのようなことをしているのか勉強不足でわからないのですが、専門高校としては横串を刺していけるような、例えば高校を中心に工業、農業、福祉といった専門高校に横串を刺していけるのかが課題になってくる気がいたします。

〇玉川大学・寺本委員

ありがとうございました。観光ビジネスという新科目が来年度から登場しますが、これの議論を水産高校ではやっていらっしゃいますか。

○沖縄水産高等学校・大屋委員

商業科がありますが、観光ビジネスではまだやっていないですね。まだ簿記に力を入れているような感じです。

○玉川大学・寺本委員

それでは国内で最先端の活動をされ、学校の中に株式会社を作っていらっしゃる、金沢商業高校の北村先生よろしくお願いいたします。小中高の資質・能力について、どんな資質・能力をもった子どもがうちの高校に来てくれたらもっと伸びるのに、と考えられたことはありませんか。

○金沢商業高等学校･北村委員

うちの学校に興味があるなら、どんな子どもでも良いと思います。ここに来て色々な経験を通して学んで、自分のなりたいもの、行きたい先に行ってくれれば良いなと思います。

今「最先端」と言われて恐縮ですが、株式会社を立ち上げて５年、旅行代理業も立ち上げて同じくらい経っています。がんばってはいるのですが、今はマンネリ化していて、活動も一部の先生に限られているという課題もあります。そのため、他の先生たちが手伝ってくれるかということが一番心配なところです。商業高校ですので、どちらかというと観光よりは簿記や情報処理を主としています。

自身の学校でも、２年後には観光ビジネスを取り入れていきます。最初は全員履修させようという声はあったものの、今はそれが消えつつ観光サービスコースに観光ビジネスをおいてやってみるという話になっています。実際に観光に 10 年くらい携わっているのですが、観光から学べるものはすごく大きいのでもう少し広げていきたいです。

この会があることで、いろいろな先生がそれぞれの取組みを知ることができ、それを実践できます。さらに、実践できる先生が増えると子どもたちがついてくるようになります。先生の育成の観点からは、先生自身がやりやすいようにしてあげるのが一番大事なのではないかと思います。いろいろな先生が参加しやすいようなシステムが必要です。参加して実践できるようなシステムを作っていけたら、その結果として生徒たち、子どもたちにつながっていくような気がします。

求めたい資質・能力は小中高でそれぞれあると思いますので、それを育てるための先生の育成は大事だと思いました。

○玉川大学・寺本委員

特徴的な活動として、兼六園で観光ガイド体験会をやっていらっしゃると伺いました。高校生のどのような資質・能力が伸びていますか。

○金沢商業高等学校･北村委員

一番は、コミュニケーション能力で、日に日に変わっていきます。あとはプレゼン能力、おもてなしの心です。いろいろな所で気遣いができるようになってきます。例えば、水たまりがあると「水たまりがあるので、こちらにどうぞ」とか、とても暑い日は「暑いのでこちらの日陰で説明します」という、ちょっとした気遣いができるようになります。今まで商業高校の生徒が就職した際にすぐに求められる能力が、自然に観光ガイドで身に着けられます。

○観光庁・刀根
　気になったところは、小中高の観光の意義について理解を深めるところ、ギャップがあるというお話です。例えば、根本的に変えた方が良いのか、具体的な取組みの中で何とでもなるのか、そのあたりの感覚はいかがでしょうか。

○成蹊小学校・内川委員
　例えば「地域の魅力を価値に変える」は、変える力が何に活用できるのかを考える必要があります。「地域の魅力を価値に変えることで考える力を養う」と変えるなどしなければ、このままでは資質・能力ではなくて地域の魅力を価値に変えるそのもので終わってしまいます。高校ではより具体的な言葉で表現してあるので、「価値に変える」とどんな力が育つのか、表現できると良いと思います。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員
　内川先生と同じなのですが、高校の方で並べられている能力は恐らく小中も含まれているのかなと。多分、言葉につながりがないだけだと思うので、そこを改善できれば良いという印象を受けました。

○沖縄水産高等学校・大屋委員
　水産の教育では、分野として考えているのは資質・能力で、先ほどのコミュニケーション能力、人間性の能力につながるのではないのかなと思います。また、高校教育を通して将来設計能力も身についてくるのではないかと思います。
　我々の実習の一環では危機管理能力（環境を考えながら）を養っています。水産教育では世界を股にかける航海生を育成しているわけでして、世界的な視野を持つ生徒を育成しようと、幅広く情報収集し、授業に活用しています。観光としては海洋観光が出てくるので、それに関しては実際に生徒の出口先でもありますし、将来の海洋観光を発展させるためには、そういう資質・能力を持っていないといけないと、生徒に伝えています。

○観光庁・田中
　私、事務局ではありますが、大学で観光教育の非常勤講師をしております。高校の方で観光ビジネスの授業が始まることにとても期待していますし、とても心強いなと思います。私が知っている学生で観光業界に就職をしたい学生は非常に多いのですが、観光業界のことをよくわかっていません。観光業界のすそ野の広さ、観光業界＝旅行代理店と思っている人が圧倒的に多くて、観光は地域や社会に関わっていることを私がゼロから教えています。北村先生がおっしゃっていたようなガイドを通じた現場実践能力が備わった高校生たちが来ると、大学教育は、より一歩進んだ教育ができるのではないかと聞かせていただきました。

【ブレイクアウトルーム②】
○立教大学・村上委員
　最初の議題は、発達段階別の取組みイメージです。観光を通じて持続可能な社会をつくるため

の資質・能力はこれで良いのか、あるいはこれをどう作るのかといった話です。議論としては非常に難しいのですが、小中、高校普通科、高校専門学科の各分科会ではどのような話だったのかを発達段階に関係づけて説明をしていただけないでしょうか。

分科会長だけが集まった事前会議がありまして、小学校の 1 年生にどこまで求めるのかは難しいという話になり、小学校中学年ぐらいから観光教育が入れるのではないかという話になりました。まず、小学校で教えるべき観光教育について、お願いします。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

小中の分科会では、故郷のよさ、故郷が好きだ、故郷の良いところを自慢しようというところで止まってしまうのですが、これからの観光教育を考えた時には、自分の地域の良さを地域の魅力として価値に変えていくことをしなければならない、と何度も話が出ました。地域に愛着と誇りを持つということは今までもやられていることですが、そこから高めて地域の魅力を価値に変えるという教育に移行していくことが大事だという意見が多く出されました。

○立教大学・村上委員

例えば、豆腐が有名な場所で豆腐をいくらで売るかということが価値なのでしょうか。それとも、この地域の人は他の地域の人より優しいよ、だからこの土地の価値は人に優しくすることだよということなのでしょうか。もしくは、伝統を重んじているので華道ができるのだということが、価値なのでしょうか。価値というのは、具体的にどのようなものでしょうか。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

分科会の意見では、観光というのは人をもてなすことで、自分の地域と他の地域の交流があるところに観光の良さがあるので、自分の地域を知って良いところだけということでは観光教育とは言えないだろうという意見がありました。比較や自分の地域を自慢するということは全国でもやられていると思いますが、まちづくり教育と観光教育の違いとして、他の地域からはどのように見られるか、ということも重要だという話になりました。

○立教大学・村上委員

交流する価値という話ですね。例えば、自分がよその場所に旅行して、あそこであんなことがあったと経験して帰ってきて皆に話し、よその地域の人がやってきたときに、「おたくはこんなですよね、うちはこうなんですけど」、というような話があるということでしょうか。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

そのあたりまで深堀はできていませんが、自分の地域をブランディングしていくことによって、他の地域から見たときに魅力的に感じてもらうためにどうするかということだと思います。

○立教大学・村上委員

子どもが大人になっていくときに、よその地域を見る目、例えば、親だけを見ているのではなくて別の大人を見るのと同じように、自分の目を鍛えるというようなことでしょうか。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

それもあると思います。私が聞いていたのは、フランスやイタリアが、自分の地域にブランド品があり、それが価値になっているのですが、観光がある前まではブランド品を生み出せるまちだという価値は地域にとってなかったと思います。ただし、ブランド品を生み出せる歴史のあるまちなのだと、世界の人があこがれるようなブランドを生み出せる国になったのは、観光立国を進めてからだと考えて、理解できることが価値なのではないかと思います。自分たちだけが良いと思うだけではなく、交流によって自分の地域がすごい価値を持っているのだということを実感し、発信していくことだと思います。これが観光教育の良さではないかと思います。

○立教大学・村上委員

次に、中学校は、小学校からの教育を引き継いで、どのようなことが重要になるでしょうか。

○品川女子学院・河合委員

二つあると思います。

一つ目は、小学校で他の地域と比べてどうなのかというところがあり、それを元に、このまちの日本での位置づけ、世界での位置づけについて見つめて考えるということが挙げられます。

二つ目は、中学校段階になると職場体験が入ってきますので、キャリア教育という意味も含めて、観光業に関わる仕事はどのような仕事があるのか、観光に関わるステークホルダーはどのような人たちなのかを知っていこう、この地域の中でどのような人が観光に関わる仕事をしているのか、を見つけようということが挙げられると思います。

それらを踏まえて、高校では経営企画につなげ、データを見て、インバウンドやアウトバウンドへの訴求検討につなげられるのではないか、そのような橋渡しができると思います。

○立教大学・村上委員

中学校では、旅行する能力を高める取組みは無いのでしょうか。

○品川女子学院・河合委員

中学校では旅行をプランニングする能力について、授業の中で取り上げてはいます。結果的には自分が住んでいるまちを見つけることにはなりますが、見つめるためというよりは、他のまちに旅行に行くとしたらどのようなプランを立てるかということがメインになります。中学校の社会の基本の、日本を見つめよう、世界を見つめようということとともに、自分の地域にはどのような観光に関わる仕事があるのか、という両面から観光業を考えていくことができると思います。

○立教大学・村上委員

私が最初に長距離旅行をしたのは小学校６年生の時です。私の家は埼玉ですが、関西旅行を一人でしまして、夜行列車に乗って旅行をしました。その時初めて、一人で小学生が旅行をする時は、子ども料金ではだめだということを知ったのです。一度家に帰って、母親に倍かかるのだよ、と伝えました。当時、東京・大阪間は 1,670 円だったのですが、僕は 800 円ぐらいで行くつもりでいて、親に倍のお金をもらって夜行列車に乗って神戸に向かいました。

また、中学の時には友達と一緒に、はじめて野宿をしました。それまで、旅館に泊まることは

していたのですが、旅館じゃないところに泊まるにはどうしたら良いかということを考え、プランニングする力の醸成につながったと思います。

半世紀も前の話なので、今の世の中とは異なるのですが、今は今で、旅行する力、例えば、どうやってスマートフォンを利用するのかとか、どうやって電光掲示板を見ていくのかとか、情報をどうやって処理するかという力は中学生で学びをスタートしますね。

それでは、小中高という流れの中で、小中のつながりは高校で受けられるものでしょうか。

〇岩倉高等学校・大日方委員

引き受けられるとは思いますが、現在は、中学までが義務教育となっているため、高校受験において選択して、生徒がそれぞれの進路に向かっていくということになると思います。その中で、自分がどういうものに興味があるのかを把握して学校を選ぶ子もいれば、近い学校にたまたま観光を教える学科があるとなると、そこにしか行けない・行かないを選択します。ある意味、強制的な様相で入ってくる子もいます。どのようなモチベ―ションを持たせて、中学まで学んできた観光の内容を磨き上げていくかが、必要になると思います。

また、３年後には大学進学または就職、専門学校という進路選択があります。試験などもあり、３年と言いながらも、実質的には、かなり短い時間の中でスキルを上げていかなければいけません。もし、観光に興味を持てば、大学でも観光に関連する学部や学科に進んでいくことになると思います。その中では、観光を通して様々な体験を行い、例えば、高校であれば、修学旅行があるので、修学旅行を生徒がプロデュースしたりすることで、観光について小中で学んできたことが活かせると思います。その中では、発表の場をしっかり設けて、いかに大人と関わらせるかということが必要だと思います。

加えて、職業観というところで、そういった経験をした子たちが、観光業に従事し、関連産業に従事する流れをつくることが、我々に求められていることだと感じました。

〇立教大学・村上委員

高校の普通科について一番重要なポイントは、自分の生活をどう考えるかということなのです。働くことと、働かないことと２者に分けるとすれば、働かない時になぜ旅行をしなければいけないのかということを考える必要があると思います。ゲームのような二次元から三次元に移動していくときに、どう変わるのかを考えるのが重要なことで、その資質を高めることとして、「気づく力」、「問を立てる力」、「解決する力」という表現をしました。これらがないと、実は大学にいけないので、高校普通科では、そこに到達させておくことが重要だという話になりました。

一方で、日本というのは、働くことが正しい、働かないことは正しくないと、ずっと教えています。つまり、生産は正しいが消費は正しくないと教えます。その典型的がムダ使いをするなという教えです。

私が高校で教鞭をとっていた立教新座中学校・高等学校の高校では、先生と生徒の間で考えが対立してしまっていました。生徒は、今日これ使わなくても良いや、また買えば良いからとなるのですが、教員は年代的にそのような人生経験をしてこなかったため、また買えば良いという考えは間違っていると教えてしまいます。でもそれは、観光からすれば間違いです。自分が直面している課題に対する意識を高校生がしっかり持たないと大学に行ったときに苦労します。

また、このコロナ禍において、日本の経済を支えているのは、もはや第三次産業であることは、

よくわかったと思います。高校普通科でもしっかり教える必要があるという話になりました。これは専門学科と普通科で絶対的に違うところです。普通科は、技術や知識といったものをそれほど重視しないところがあります。この技術がこの社会の中で、このことを人々にさせてくれるのだということを教える必要があると思います。結局、職業として何かを考えていくか、教養として何かを考えていくというスタンスは高校ごとで異なりますが、観光教育に取り込んでいくことが必要です。実際に就職して会社に入ると、やっぱり働くことだけではなくて、働く時間以外の時間の重要性に気付きます。

普通科からすれば、小学校で学んだことを中学校が否定することはなく、中学校で学んだことを普通科はそのまま受け入れられるという構造になっていると感じましたが、他方で、まだまだギャップがあると理解しました。

実は、中学から就職する人は、2019 年度は全国で 960 人でした。99%以上の人が高校に進学するため、入ってきた子に対して高校を選択する目標を教えることが非常に重要で、そこに観光教育がすんなり絡められればと思いますが、現状はまだまだ難しい状況だと思います。

○岩倉高等学校・大日方委員

高校に入ればある程度行動範囲が広がるため、地域によってはアルバイトなどもしながら社会経験を積んでいくことが重要です。今まで中学校で学んできたものを、高校専門学科の授業の中で楽しむということをどのように伝えるかが一番重要だと思いました。それが、消費を生んで生産するという、働き手の立場だけでなく、自分が消費者になるという感覚も育んでいくことにつながると感じました。

今までの高校専門学科では、どうしても職業の方に目が行ってしまい、サービスを受ける側と提供する側の両方の立場を学ぶということはできていなかったと思います。教員の立場としても、教員と生徒の立場の両方を考えなければならないのと同様に、「相互理解」を発達段階で意識させていくことが必要だと思いました。

○品川女子学院・河合委員

中学校段階では逆に難しいかもしれないと思いました。小学校のときは自分のまちを探検しようという段階です。中学生になると、わが街の探検をやるべきだと学習指導要領にも記されているのですが、なぜか、安全性の問題でやってはいけないと学校から止められることが多く、外に出る機会がとても少ない状況です。自分で一人旅に出るとか、何かしら旅に出るということを自分で計画を立てて味わうことが必要だと思います。それがあってはじめて観光や旅が楽しいのだと思えるのではないでしょうか。

中学校になると、遠出は修学旅行ぐらいしかないので、学校によっての温度差がかなり大きいのではないかと思います。

○立教大学・村上委員

小学校において、旅の楽しさや、人が来てくれるときにその人を喜ばせる価値というものは、どのように教えたら良いのでしょうか。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

中学校では外に出ないというのを聞いて、ZOOM などのウェブ会議システムも活用して、実際に人と関わって体験することを小学校でやらないと、それ以降での実施が難しいことを聞いてびっくりしました。

〇立教大学・村上委員

小学校では、他の地域と自分の地域を比較しながら、その特性について学ぶことがまずあって、そこで楽しさを学んでおかなくてはいけません。

その後、中学校で引き受けたときに、中学校では、それと仕事という関係を学ぶということがあり、他方で、社会との関係を作りながら観光を学んでいけるように課題解決を進めていく必要があります。

高校では、専門学科と普通科があって、普通科は個人としての自分をどう旅とつなげていくか、という課題解決が必要で、それができなければ大学での学びにつながっていけないという一方で、専門学科は職業としての観光の素地を身に着けつつ、消費者目線で考える力を育む必要があります。

討議１のまとめは、このような内容でいかがでしょうか。

〇一同

異議なし。

【ブレイクアウトルーム③】

〇日本大学・宍戸委員

自己紹介ではないですけれども、初めて顔を合わせる方もいらっしゃると思いますので、簡単に自己紹介兼ねて一人 2 分ずつくらいお話いただいて、導入とさせていただきたいと思います。ご提示があった論点１の中に観光を通じて持続可能な社会を作る資質・能力として、各発達段階で何を意識すると良いか、あと先ほど３つの分科会のまとめを踏まえて、今回上がった小中高校普通科、高校専門学科、これを見ながらどのように考えているか、高嶋先生、高清水先生、中谷先生、鈴鹿先生の順番でよろしくお願いします。挙がってきたものをベースに自己紹介、簡単な感想でも良いですしご意見などいただければと思います。

〇法政大学国際高等学校・高嶋委員

私は普通科の高校の教員ですが、大学付属校という特殊な状況の中で、観光教育を取組んでいますので、発想はどうしても大学との連携という部分につながってくるかと思います。ただ、村上先生もまとめていただいたように、普通科のニーズとしましては、高等学校普通科と大学との連携というものは付属校に限らずかなりあるのではないだろうか、というところで発言させていただきました。高等学校普通科と大学との連携という観点におきましては、高校の学びが大学の研究内容との直接の関連が明確でない中で、大学の教員も高校で学んできたことが、直接大学の研究につながらないことに戸惑いを感じているということを第 2 回の分科会で京都外国語大学の

原先生にご紹介いただきました。

私が普通科で観光教育をやっていく中で、その連続というものをかなり意識しています。観光を題材として様々なレポートを書かせてみる、現地を見学するなどの作業を続けていきますと、授業の枠にとらわれずに様々な観点でモノをみる視点を得ることができると思います。今まで小学校、中学校、高校と学んできた、いわゆる国語・算数・理科・社会の枠組みから、社会の実際の研究あるいは実社会での活動につなげていくときに、観光の観点で地域を見ていくと、今まで持たなかった発想を持てるのではないかと考えています。今回論点１としましては、発達段階別の取組みイメージということですが、今までの学校教育の枠を壊して、社会に自分がつながっていくことを考えていく観点が観光教育の中で得られるのではないかと考えております。私の方からは以上になります。

〇宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

私は元々小学校・中学校の教員をしておりますが、今年 2 年目ということで生涯学習に携わっております。

観光教育を考えたときに、私は小学校の教員を経験している以上、将来的なビジョンを考えていくと観光教育に関する基礎・基本が小学校段階で学ぶことができれば良いと思っております。簡単に言うと、各県、市町村と比べられるようになるためには、自分の住んでいる地域での素材を学んでおく、そしてそれを表現することを身に付けておく必要があるのではないかと思います。さらに発表する相手も、先ほど高嶋先生も仰っておりましたけれども、今までの壁を壊していく必要性があるのかなと思っており、発表する相手、伝える相手も小学生対小学生ではなくて、小学生対高校生、あるいは大学生にするなど、プレゼンする相手を異年齢にするのも一つの手かと思っています。小学生と小学生では形にはまったものしか中々表現できませんけれども、例えばプレゼンした相手が大学生や高校生であれば、質問する内容も具体化されるのかなと思っています。そのような自分たちのプレゼンの力をつけたり、自分たちの市町村の材料を理解したり、各市町村とも観光に関する内容の比較ができたりなど、小学生のうちに基礎・基本を身に付けられるような素材を取り扱ったら良いのかなと思っています。

〇北海道ニセコ高等学校・中谷氏

前回から参加させていただいて、発達段階において何を意識して学ばせるかを深く考える機会になったと思っています。当校に関しては、元々観光コースがありますので、観光を学びたい生徒が入学してくるパターンが多いです。色々なアプローチとしてニセコ町の特徴として外国人が非常に多いので、自分たちの魅力を誰に伝えるか、どのような人に伝えるか、例えばニセコ町だと日本人だけでなく外国人にも伝えなければならない、そのためにはどのような能力を付けなければいけないか、国際的な教養を身に付けなければいけないなど、各校によりアプローチが違う

と思っています。

本校に入学する生徒に関しては、昔はホテルなどに就職したいという生徒が多かったですが、今は英語を頑張って地域やグローバル社会で活躍したいという生徒が入ってくる機会が多いです。

発達段階別には、高校においては、地域の魅力を知っていて、常に日本だけでなく海外の方にも伝える、そのために各外国の特徴を知っている、それ以前に日本の方にしっかり自分の地域の魅力を伝えるというところも教えていかなければいけないと思っております。またそれに伴ったアウトプットに関してもトレーニングしなければいけないと感じております。

〇徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

皆さんのお話を聞きながら、年代別、発達段階別ということを考えるときに、小学校だと女川小学校のイメージが強くあります。高清水先生が数年前に女川町をどう作るかを子どもたちと一緒に取組んだとき、トンネルをこう工夫したいとか、ここにカフェを作ったらどうだろうか、海のレストランを作るなど、きらきら光るようなアイディアを子どもたちがどんどん出して自分たちにプレゼンしてくれたのが非常に面白く、子どもたちは地域を深く考えているなと感じ、これは大きな観光教育の一つだと思いました。

もう一つは女川小学校でいうと太鼓の伝統教育がずっと続いています。太鼓が流されて自分たちの支援活動がスタートしたという経緯がありますが、伝統を守る、見せるものがある、これだけで一つの観光教育であり、自分たちの地域の観光素材を自分たちの手で守っているのは非常に大きな取組みだと思います。各地域にもこのようなことがあると思うので、まず小学校段階では地域に目を向けて学ぶ段階だと思います。中学校や高校になってくると、地域から県内に広がったり、場合によっては日本に広がったりという形で、次の広い視点になり、専門高校は海外まで含めてきちんと見ていく、比較していくというのが、発達段階別で見ていくべきところだと思います。

共通しているのは、それをどう表現していくのか、単純なプレゼン能力だけではなく、見せ方を含めて、段階別でコミュニケーション能力が付くことで、こちらに来た時にはウェルカムができるし、逆に自分たちが行ったときには聞きたいことが聞けるようになるのではないでしょうか。

日本人の特徴として質問ができないということがあります。いくつかの国で授業をさせてもらったりすると、日本人が一番質問をしません。教室を見ても、後ろの席から埋まっていき、前が空いていきます。反対に、海外では必ず前から埋まっていき、授業が終わるとしばらく質問責めになります。そのような能力が日本人にももっと付けば良いなという思いがあります。それが観光を学ぶ中で一緒に身に付いていけば、面白いのではないか。そこから比較したり、実際にあるもの同士を組み合わせ新しいものを生み出すプロデュース能力が付くことが幅広い観光分野の中で大きいのではないかと思っています。

〇日本大学・宍戸委員

どうもありがとうございました。時間がありませんので私が改めてまとめることはいたしませんけれども、私も感じたことがありました。

次の小中高校普通科、その他の自分がこれまで指導してきたところ以外の記述も見ていただきながら、縦のつながりを意識した中でそれぞれどのようなことを感じられたかお気づきの点をお話いただきまして、その後自由議論に入っていきたいと思います。例えば自分の所属した分科会と別のところのキーワードや内容で、自分たちの教えている内容や学生・生徒とは違う観点で、逆に自分たちではやらないかもしれないということでも結構ですし、同じだというところでも結構です。高嶋先生から順番にお願いいたします。

〇法政大学国際高等学校・高嶋委員

普通科が観光教育でどのような役割を果たすかと考えたときに、中途半端というと語弊があるのかもしれませんが、真ん中にある存在なのかと思います。小中において、観光として地域を発信する力を身に付けて、地域と連携していく楽しさを知った上で、高校の専門学科においては、具体的にプロデュースしていく力を身に付けていくという状況の中、普通科は大学や専門学校で本格的に観光をプロデュースしていく機会が想定されるので、普通科では具体的な観光の学びではなく、生徒自身が次の進路に向けてどういう力を身に着けていくかという、目標の達成が個人に帰結すると感じている部分があります。

例えば第２回分科会で話題となった価値観や美意識をいかにして磨くかということ、何かに気付く力というのも非常に抽象的でして、気付いたうえで具体的に何をするのかというときに、普通科に在学しているうちはその成果を求めず、その後の発展というところを意識しているのではないかと考えています。では観光教育を普及していく中で、普通科は一体どのような役割を果たすのかは非常に悩ましいところです。皆さんに意見を伺って、こんなこともやってみたらどうか、などアドバイスを頂ければと思っています。宍戸先生のお話の論点からずれているかもしれませんが、皆さんのまとめた内容を以て、率直に感じたことをお話しさせていただきました。

〇宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

私の方では小中の先生が、意義あるものにしていくためには、高校の普通科でも専門学科でも、どのようなことを目指しているのかが分かる必要性があるのかなと思っています。その中で小中の教職員が、どんな枝分かれをしても良いような素材や引き出しを子どもたちに植え付けておく必要性があるのではないかと考えます。例えば、自分の町を調べたことによって、さらに大きく日本はこんな国だよねと調べ、まとめ、プレゼンする力を付けられるようになると良く、それをどのような方法で植え付けられるかということが重要になると思います。高校や大学に向かう子どもたちが、観光教育をどのように進めて行くか、縦のつながりをどう意識していけば良いか見るためには、上位の学校がどのようなことを目指すべきなのか、どのようになるのかを知るタイ

ミング・チャンスがあれば良いと思いました。

○北海道ニセコ高等学校・中谷氏

本校でも観光コースで教えることに関して、観光のすそ野の広さを知らないため、どのような仕事なのかを知ってもらうのに時間がかかります。また、人見知りや人と話せない、自分で作ったものを試すことができない高校生がいるということをすごく感じています。小中に求めることとしては、人前で話せて、質問して答えてもらう、大人に教えてもらうことなどです。自分の地域の観光資源に触れて自分で感じてもらうことも必要です。中学校の中で、観光という仕事がどの産業にもつながることをイメージして高校に入ってもらうことで、高校で何と何を組み合わせて作り上げるとか、どのような人にアプローチするかなど、少し専門的なことをしていくことができるではないかと思っています。観光を勉強していきますといっても、ホテルなどのイメージしかない子どもも多くいるため、そのような点をどう払拭していくことができるかが今後の縦の連携につながってくるかと感じています。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

送っていただいた資料を全部は読めておりませんが、ある程度見させていただいた中で、共通として何を育てたいかという指標をきれいにしていかなければいけないかなと思っています。

その中でキーワードとしてコンピテンシーという言葉が出ていました。単純に知識技能を追い求めるのではなく、主体性・積極性など色々な指標がありますが、この指標の中で何を育てたいのかということを同時に考えていかなければいけないのではないでしょうか。そこで、普通科でも専門学科でも小学校でも育てたいところはあると思うので、この学びの体験をすることで、こういう能力を身に付けたいという狙いがはっきりすると良いと思います。この段階で、このようなところまで育つのだよね、と見える状況が作れるのではないでしょうか。

その中の一つが俯瞰する力やプロデュース力であり、気づく力や問いかける力が出てくるのではないでしょうか。それとは別に、ネット以外にも知識を得るために最低限必要なものがあると思うので、それがどこまでなのかというところも含めて、その部分が小学校段階の基礎・基本にもつながってくると思われるので、そのあたりのアバウトな指標ができたらと思っています。

○日本大学・宍戸委員

ありがとうございました。それぞれのお考えは縦を意識されたご発言だったと思います。残り10 分を切っておりますので、なかなか難しいところですが、私の方から３つほど挙げると以下の3 点になります。

鈴鹿先生がおっしゃった、観光教育の特徴としては、小中高問わずコンピテンシーやプロデュース力、他の科目とどう違って観光教育では有効かというと、やはり地元に素材があり、そこに総合的な学びの要素があるというのが一番大きいのではないかと思います。話の中で壁を壊す、

外へ出ていくなどありましたが、ほぼ行動を伴うことで実践的に学ぶという意味で考えると、これだけ観光が地域に根ざした事象として考える中で、大学含めどの学校問わず、学習対象として観光は意味があるものと感じます。

もう一つは、先ほどお話に出てきた地域を知る、そのためには外国を知るなど、比較していくためには自分を知り、他者を知らなければならず、両方知るために観光という仕組みは有効であると言えるのではないかと思いました。そして、それを他者にプレゼンしていく、実際にプロジェクトや商品開発、もちろん誘致やプロモーションなど色々な形でアウトプットに必ずつながっていく取組みがしやすいのが観光ではないかと思います。

もう一つは、小中や普通科、専門科で基本とする能力や年齢は違い、例えば経済の議論を皆で検討することは一般には難しいですが、観光や旅行は誰もがするもので身近にあるため、大人も含め違う世代で議論するために有効な土俵になるのだと感じています。小学生が大学生や高校生から学んだり、我々が小学生に説明したりすることで、大人が分かりやすさを学ぶこともできます。例えば外国人が来た時に、日本の文化や言葉を知らないため、初心者に教えなければならないという中で、異者・他者の人たちにどのような言葉で伝えるかといったコミュニケーションの観点が観光にはたくさんあり、観光の持つつながりの強さが対象になる印象を持ちました。

これらをどのように文言にするかという問題はありますが、これが必要ではないか、足りないのではないか、良いと思うのであれば、さらにこうしていくべきではないかという点をMURCさんの作っていただいた資料、皆さんの意見や私の発言をもとに何かコメントをいただければと思います。

〇法政大学国際高等学校・高嶋委員

観光教育ではアウトプットがしやすいというのはまさにその通りだと思いました。教育活動には様々な教育目的をもって各教科や学校全般の活動に取り組まれていますが、その成果が具体的に見える形にならないことも多々あります。しかし、学校には教育活動に一定の評価をしなければいけないため、こういった形で地域とつながり、生徒たちはこのようなことを考え、実際にこのようなことをやってみましたということを見える形にすることができるという点で、観光教育は取り組みやすいものと言えるでしょう。観光という大きな枠組みで教育を考えてみませんか、と提案しやすいものであり、今後観光教育を普及していく中で是非ともPRしたいところだと思いました。

〇宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

私の方でもこれから観光教育を伸ばしていくときに、子どもの興味関心を高めるためには、机の上だけでは絶対に伸びないと思っています。色々な体験活動や、自分が出向いて体感することや学ぶことを取り入れる必要性があると思っています。

○北海道ニセコ高等学校・中谷氏

つながりというのは観光の特色だと感じています。また様々な経験をすることによって、人は大きく成長し、話すことができるようにもなるので、そういった意味で観光のつながりは非常に大切だと感じております。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

皆さんもおっしゃる通り、つながりはすごく重要だと思っていて、各成長段階において、次の段階の一つ手前の段階で観光要素を体験する（高校に中学生が体験入学に来たときなど）ことができると良いかもしれない。自分たちは VR やプロジェクションマッピングなどをやっています。高校に入ったらこんなことを学べるのだ、面白いなということを下の代で基礎をしっかりやっておいてもらうことで、より強く思ってくれて、成長できるので良いのではないかと思います。

○日本大学・宍戸委員

先ほどもう一つ言いそびれてしまったことがあります。小学校で学んだベースが広がり、中学校ではより専門化して掘り下げることができると思いますが、皆が小学校から観光をきちんと学んでいくわけではなく、高校で初めて観光を知ると小学校と同じ地点から入ることもたくさんあると思います。全体をひとつの絵に描くことはできると思いますが、一方でどこからスタートしても良いところもあり、旅人やインバウンドということが多く言われる中、皆がこういったことは知っておきたいということもベースにはあるのかなという気はしています。後は、次の学年では今度どのようなことが勉強できるのだろうかということを知る（中学校であれば高校、高校であれば大学）という意味で全体像が描かれているのはとても大事なことだと思いました。

【全体共有】

○日本大学・宍戸委員

小中、高校も普通科、専門学科が始めて同じ場に集まったので、まずは自己紹介から始めました。それから、率直な感想を聞いていきました。ポイントとなる内容は大きく 2 つあったと思います。

一つ目は、小中高どれをとっても、地域を深く知ることができる、その結果、外にも興味を持って知っていけることが観光教育の持つ価値だろうという話になりました。アウトプットにつながる実体験を持つこと、つまり、外とつながることができると言えます。どの発達段階においても、社会を知ったり学んだり、コンピテンシーや能力を高めるうえで観光教育が非常に役に立つという内容が共通の点でした。一方で、そのあたりが学年ごとにどう違い、どう繋がっていくのかは議論の余地がある印象を受けました。

二つ目は、小中では基礎を学ばせなければならないので、いろいろなことを広く学び、引き出しを多く用意することが重要です。一方で、中学校ではどのようなことを学べるかを知って、送り出したく、次の高校では大学に繋げる形で送り出したいということが重要で、このような意味では全体的な体系が出来ていることによって、より観光をどう学ぶかをイメージできることが価

値だろうという話になりました。また、最終的には外国人や来訪者にPRをするようにアウトプットにこだわっていくことが、観光教育で実現できることだと思います。

それぞれをどう繋ぐかも重要な点であり、行動として繋ぐことになると思われます。例えば、一緒に行動して発表会をしたり、体験入学をしたりと、それぞれの学びの成果を教え合うことにより（上の学年から下の学年だけでなく）、人に伝えるという経験や他の学年のことを知るきっかけになります。その中で、観光とは、全ての人が旅行をし、地域に出ていくことのできる活動であるため、どの学年でもそれぞれの体験を語って、議論をしやすいのではないでしょうか。小中高、普通科、専門学科が同時に縦を意識しながら一緒に活動できるのは、観光以外ではできないのではないでしょうか。

〇立教大学・村上委員

小学校で学んだことが、中学校にどうつながり、高校でどう引き継いでいくのかという内容を話しました。

小学校で学ぶことの重要なポイントは、地域がある、他地域がある、地域同士で違いがあるといったことを知るということです。討議の中でこの言葉自体は出てきませんでしたが、移動そのものの価値を体験的に覚えることができると思います。

これをベースに、中学校では職業として観光に関わっている人を知り、観光がどういう仕組みで出来上がっているのかを知りながら、お互いの地域や旅行者と地域の人の相互理解をするのかを知ることができます。

高校と中学の間には大きなギャップがあり、高校に入る時に大きなシャッフルがある。その際に、もう一度どうやって観光教育に興味を持たせるかが重要となります。普通科では、人として生きていく中で、旅をすることにどのような意味があるのかをきちんと捉えることが重要だという意見がありました。

〇玉川大学・寺本委員

資料の中の言葉について、小学校段階に「地域」という言葉がありますが、定義が重要になります。「旅行」「観光」の使い分けや、「観光を通して気付く力、問いを立てる力、解決する力を高める」の方が適切なのではないかという言葉の議論がありました。言葉は概念規定や訴求力につながるため、言葉の吟味をしていく必要があります。小中高でバラバラにならないように、きちんと積み上がるように構成することも重要です。

金沢商業高等学校の北村先生は兼六園でのガイド研修などをされていますが、その結果、経験した子どもたちは、コミュニケーション能力やおもてなしの心が伸びているというお話がありました。人間形成能力や将来設計能力につながるというご発言もありました。

いずれにしても、小中高で観光を通してどのような力が身につくのか、わかりやすくて明確な言葉で概念規定することで整理することができると思います。

② グループ討議２「取り組みの促進策」

【ブレイクアウトルーム①】

〇玉川大学・寺本委員

観光教育はまだ始まっていないと言えます。これまで一部の大学や専門学校で扱われてきましたが、それを小中、普通科の高校にまで落とし込み、一種の国民教育として観光教育を推進するためにはどうすれば良いのか、ネットワークづくり、サポート体制など、ご意見を頂けますでしょうか。

〇成蹊小学校・内川委員

現場の悩みやサポートしてほしいことを考えると、あれもこれもと思い浮かんでしまうので、いろいろ要望させていただきます。

教材づくりについては、昨年度観光庁さんがまとめてくださったものがあるので、参考に出来るツールはあります。それに加え、それをもう一つ大きな機運に乗せていく必要があり、そのためには取組まなくても良いという規定があると難しいと思います（文科省の学習指導要領との絡みは置いておいて）。世間的に、観光教育が盛んに取組まれているという雰囲気を作りたいと思っており、コンクールのようなイベント（子どもが評価されるイベント）から入っていくのは、一つの手段かと思います。小学生には地理検定というものがあるように、観光検定をしてみるなど、小学生が興味を持つきっかけを作ることが必要かと思います。

また、観光教育を波及させるにあたり、副読本やパンフレットなどを用意したり、教員免許更新時に指導があったり、研究会を立ち上げるなどの取組みが大切だと思います。

授業が進まない理由として、教員だけで観光を教えるのが難しいという点があります。教員があらたな教育に取組む際に難しいのは、他団体との連携を構築することですので、そこをサポートしていただけると、観光教育が推進するのではないかと思います。観光教育で言うと、観光協会や地元の観光施設とのつながりが必要です。

〇学校法人希望が丘学園　鳳凰高等学校・中村委員

高校の近くに観光協会があり、自身も活動をする際に、観光協会の方から学ぶようにしています。教員は、なかなか学校の外に出て学ぶ機会が少ないため、ランドマーク的に、どこに行けばどのような情報を得られるかが分かると良いと思います。

教員のモチベーションの維持も課題だと感じています。生徒に活動をしてもらう際は、教員自身のファシリテーション能力が重要です。また、観光教育は教員自身が教えられるものではないので、探究活動を上手く進めるために観光教育を使うようになると、面白いかもしれません。

観光教育は、やはり予算がかかるため、そのサポートがどうしても必要となります。お金をかけずに「楽しむ」こともありますが、「楽しむ」ためにはどうしてもお金が必要ですので、研究モデル校として助成金などがあると、学校としては取組みやすいでしょう。

〇沖縄水産高等学校・大屋委員

私の高校では、船員の人材不足に直面しており、いかに後継者を育てるかを検討しています。観光教育においても共通していると考えており、出口指導を強化する（魅力ある職業を紹介する）ことから始められるのではないかと思います。

小中高にどう落とし込んでいくかについては、海洋基本法に基づいて各自治体で海洋基本計画が策定されており、そこから学習指導要領に落とし込まれています。そのため、教員としては取組まざるを得ない状況であるがゆえに、取組みやすい状況となっています。また、現在小中にも海洋学習の内容が組み込まれておりますので、連携しやすい環境となってきています。やはり、学習指導要領にどう落とし込むかが重要だと思います。

また、産学官の連携が必要です。シンクタンクを地域レベルで設立できないでしょうか。そのハブとなるのが各地の商業高校だと思います。商業高校の観光ビジネスを学んだ学生が横串を指すような役割を担い、専門家の生徒たちが中心となり、他の生徒が参加できるシンクタンクがあると良いと思います。

大学では就職を見据えた教育をされていると思いますが、どういった就職実績があるのかという出口から攻めて、幅広い分野における観光教育の有用性を示していく必要があると思います。

○金沢商業高等学校・北村委員

前回の専門学科の分科会でも話題に上がっていましたが、横のつながりは非常に重要だと思います。以前、工業・商業・農業・演劇の４学科がある面白い高校にいたことがありますが、そこでの取組みの幅に可能性を感じていました。仮にモデル校を選定するとなった場合、その高校で取組むと面白いのではないかと考えていました。

大屋先生の言う通り、専門学科としては出口（就職）が非常に重要です。教員からすると、観光というと代理店のイメージしかありません。観光という分野は広すぎて知識が少ないため、企業や大学の先生などのいろいろな人の協力のもと、どのような仕事があるのかを話してもらうことが重要です。現在の取組みにおいても県や市の観光部局の方や旅行会社の方にご協力を頂いており、その協力のおかげで取組むことができています。

小学校でコンクールが有効だと話がありましたが、高校でもモチベーションが非常に上がると思います。経済産業省の中小企業庁ではビジネスに関するコンクールを開催しています。自身の高校では、現在「地域を探る」という題材のコンクールに参加しています。コンクールをすることで、周りの人に知ってもらえるきっかけになると思いますので、観光庁でもこのようなコンクールがあると面白いかなと思いました。

先生が様々な情報を持っていないと、授業のネタを作れないため、観光庁の先導で教員の引き出しを増やせるような場があるとありがたいです。

お金の問題についてですが、現在の観光ボランティアの取組みでは県から補助をいただいていますが、取組みを始めたころは生徒の拝観料は全て学校持ちでした。使える予算があると、取組みに対するハードルが下がると思いました。

観光ビジネスに関する教材があるので、それについては助かっています。一方で、教科書だけでは難しい部分があり、地域について、日本について、世界について、さらに、それぞれのつながりについての内容を取り上げる必要があると感じています。JTB 総合研究所の観光学基礎という教科書の中には、旅の歴史などの記載もあり、興味をそそる内容だと思います。こういった全てが盛り込まれた教科書が必要で、さらに、小中高版それぞれがあると一番良いと思います。

○観光庁・刀根

具体的な取組みをご発言いただき、観光庁でも取組むことができそうだと想像しておりました。

来年度の予算要求も通りまして、来年度は観光教育のプログラム作成と教員勉強会は実施していきたいと考えています。一方で、先生方の情報収集を重要な課題だと感じましたので、アイディアを集める場を作っていくことが必要だと思いました。

○事務局・MURC 田中

ご意見にあった通り、観光の最大の教材とは、観光に携わる人だと思います。観光協会の人の話も聞くというお話しも出ていましたが、そういった現場の声を伝えることが一番役に立つと思います。私は２つの大学で観光を教えていますが、指定する教科書もなく、いわゆる学問を教えておらず、全て経験談を話しています。自分がしてきた観光コンサルタントとしての仕事の話をすることで、観光に関心を持ってもらっています。

○玉川大学・寺本委員

教員づくりの観点から、自身の大学の授業では教員づくりに取組んでいますが、他での取組みはほとんどありません。しかし、近年、社会科や地理教育の分野では教員づくりが論議になり始めています。

アメリカ合衆国の教育プロジェクトを研究したことがありますが、ワシントンで中央研修会を夏に実施し、各州に持ち帰り、州内で展開していくような活動がありました。このような草の根的な活動も必要だと思います。

○金沢商業高等学校・北村委員

観光教育を教えられる先生というと、行動力のある人でないと厳しいと思います。普段の科目に加え、プラスアルファで実践的なことを取組む必要があるので、非常にパワーが必要です。

刀根さんのお話にあったように、アイディアを共有する場があり、それをデータベース化してあると嬉しいと思います。見に行くと、何らかの情報・ヒントを得られると、先生たちの引き出しになると思います。引き出しの多さが、生徒たちの興味関心に繋がっていくのではないかと考えています。見る（求めている）人は多いでしょうが、書き込む人が少ないので、どのようにデータベースを構築していくかが重要だと思います。

○成蹊小学校・内川委員

出口を見据えた観光産業への理解を考えると、小中においても重要だと感じました。

教材として、観光で教える際には、統計データを加工する必要があります。そのため、観光教育で手軽に扱える統計データがあると取組みやすいのではないかと思います。

【ブレイクアウトルーム②】

○立教大学・村上委員

ここでは取組みの促進策について、小学校、中学校、高校の順でお願いします。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

周知・気づきという点について、小学校の分科会では、ビデオや指導案が欲しいという意見が出ました。当校では、学校の図書室に観光に関する本がなく、あっても日本の図巻で貸出禁止と

いう状態であるため、より思いました。

静岡市内の図書館でも、小学生向けの観光に関する本はほとんどありませんでした。教師向けも、子ども向けの観光教育に関する本がないため、もっと充実させる必要があると思います。また、自分が授業をするとしたらと考えると、魅力を価値という観点で、授業の素材となるようなビデオ教材として様々なネタで 100 本ぐらいあって、社会や理科などの既存の授業で組み込んでいきたいと考えています。観光の良さや学びの価値は、様々なものに反映されていることも良さだと思いますので、観光の授業をするというよりは既存の授業で観光を扱えるようなツール（指導案、動画）があると良いなと思います。

○品川女子学院・河合委員

中学校の場合、職場体験や、観光業って何だろう・どのような方が働いているのだろう、という話をする場面が増えると思います。学校の関係者ではない方、学外の方から話を聞くということが多々出てくると思います。

特に、行政と旅行会社が最もイメージしやすいと思っています。その２団体から観光業に関わる方から話を聞いてみようとなると、行政であれば地元の話になってしまい、わがまちの観光行政としてはこのようなことに取組んでいます、という話になります。また、旅行会社の方は、近隣の住民をどこに連れていくかという話になるかと思います。そうなると、両者からの話は、こちらが意図することとギャップが発生することが懸念され、結果、教育としてちぐはぐになる懸念を持っています。そのため、どのようにパッケージ化できるか「誰に、どのようなことを話してほしい」ということがまとめられていれば、様々な業界の方にお願いできると思います。

もう１点、授業の中での取組みにあたり、観光学習をやるから地域学習なしにということではなく、今ある授業に加えてということになると思います。地域学習で地域の特性については勉強しているのであれば、同じことを観光学習で繰り返しやるということではなく、他の授業と重複しないように先生同士で共有する仕組みやシステムを構築する必要があると思います。

○立教大学・村上委員

私が働いていた高校の場合、歴史の授業ではすべての時代を教えていません。観光という話は、少なくとも近代史で 1900 年代になってからのことを教えてくれないと話がつながりません。ウェルカムソサエティが出来たみたいな話は高校生では必要無いですが、なぜ皆が旅行をすることになったのかということを教えてくれないと意味がないと思っています。大正文化と旅行というような話はしたいのですが、そこで初めて文学作品が出てきて、それが前の中国の文学とは違うのだ、という話が出てきます。他方で、授業が遅れているとスキップされるため、高校で調査などをやろうとするときに、概念として、因数分解で分解した時と同じだよと説明していました。１年生の数学で因数分解をやっているので理解が進むということです。そのような授業の進捗状況との関係はどう調整すると良いでしょうか。

○品川女子学院・河合委員

正直なところ、教員同士の人間関係によると思います。私も、古典の先生がこんなことをやっているというお話を聞き、生物の先生が１年生でこんなことをやっているというお話を聞いて、初めて２年生にこれ理科で習っているよねという話ができます。平易的なものでも良いと思うの

で、学習指導要領通りにやっていれば高校１年生でここまでやっているということになるはずなので、これは地域学習でやっていますよ、観光学習でこういうことを学習するので、この部分は１から話をする必要はないですよとか、ここでこれを学ぶということが分かるようなものがあれば観光学習でこれとこれは置き換えられるのですよ、というものがあると、他の教科や総合学習でも受け入れられやすいのではないかと思います。

○岩倉高等学校・大日方委員

高校専門学科では、科目別の話では、英語の先生に観光英語検定に関する授業をお願いしたことがあります。興味のある先生はやってくれるのですが、今までの自分のスタイルでやっているものを崩したくない、ルーティンでやっていることを崩したくないとなると、絶対に受け入れてはもらえません。そのあたりは、先生方の理解だったり、人間関係があったりします。

本来であれば、先ほど宍戸先生がおっしゃっていたように、観光をキーワードに様々な教科が横断的にできると思っています。例えば、国家資格として当校でやっているのは、国内旅行業務取扱管理者の学習です。その資格を目指すと、国内の地理の学習、運賃計算、約款や法律などを一体的に学ぶことができます。また、地理や歴史ですと、ブラタモリ的な発想で学習することによって、そこから観光に広がっていきます。例えば、家庭科であれば、地域の物産や駅弁などから学ぶことで観光教育になると思います。それぞれの教科が観光をキーワードにして教育として広げていくと全体的に観光教育が広がっていくと思います。学習指導要領に載っているかどうかは別として、観光とつながるものは何かを探して、それぞれの教科で広げていって、全体的に横断的に観光教育ができると、各校の特色も出てくるのかなと思います。

○立教大学・村上委員

高校普通科は、３年生なら３年生が全部学ぶということは必要ないと思います。必修であることはないと思います。地理の中で観光地理学としてやるのでしょう。であれば、それはそれで良いのですが、もっと狭く深く様々なテーマで観光教育をやる必要がありますが、それを学校にやってもらうのは難しいと思います。そこで、例えば、旅行業、宿泊産業などの業界がまとまって、高校のための観光教育みたいなものを作って、配信してくれるのが理想と思います。それを踏まえて全国から集まる機会をつくり（WEB も含めて）、外との連携強化を図り、学んだことに対して観光庁がディプロマしてくれるようなことがあると良いと思います。それを大学、社会に出るときの評価書に書けるため、社会連携と言えるのではないでしょうか。

学校は教員だけの組織なので、教員間で社会と関係ないことを一生懸命やり、それが学校の権力構造とつながっていて、非常に不健全な場合を危惧しています。そのため、社会とつながって、社会で動いていることと教員が連携して動いていく必要があると思います。社会がどう動いているかを教員が学べますし、生徒も学べます。社会連携で教員も学生も学ぶ仕組みを作って、それを観光庁がディプロマする仕組みがあると良いと思います。

○岩倉高等学校・大日方委員

実際に当校では観光連盟から来ていただいて、インバウンドの状況を話してもらっています。また、観光連盟の方は個人商店の方や経営者の方が多いので経営者目線の話も伺っていますし、JTB さんにも来ていただいています。また、日本テレビのアナウンサーも来ていただきました。外

部の方に来ていただき、様々な分野の話をしていただくということは価値があると思っています。
教員が勉強することも大事なのですが、一方で、そういうものに対して、教員がなかなか参加しようとしてこないということがあります。私は以前サラリーマンだったので研修などが会社のプログラムとしてあったのですが、教員になると強制でない限りなかなか出てこないところがあるので、難しい構造という気もします。

○立教大学・村上委員
小学校の手塚先生からあった図書がないというのは切実ですね。小学生向けの旅の本の充実というのはなかなか難しいです。授業開発のためのビデオも確かにおっしゃるとおり重要です。これは学校ではなくて、出版社や行政機関が担っていただけると良いと思います。
中学校から高校にかけて教科が分かれていくときに、どう観光教育が他の教科とリンクするのかという問題はとても重要な問題だと思います。授業の進捗度合いの調整は学校内で情報収集してやればいいかもしれません。ただし、学校内のコンセンサスを図ることが観光教育には重要で、教員間、少なくとも副校長に理解してもらうことが重要な課題と言えます。
また、高校の専門学科も普通科も同様ですが、社会との関係づくりが重要です。観光としてどのような職業の広がりがあるか、そこに関わる人たちはどのような人たちか、そのような仕組みと制度でつながっているのか、をきちんと教える必要があります。また、それらの方々と交流をしながら、観光における価値や課題を知ることが重要です。例えば、外国人の文化との違いなどがあり、これは教員ではなく外部とのつながりで深めていく必要があると思います。

○岩倉高等学校・大日方委員
教員が研修に行かなくてはいけないのかなと思います。実際の現場にいく機会があっても良いと思いました。九州の学校では、先生が１年間ホテルに研修に行って、実際に働くという取組みもあるようです。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員
地域の子ども観光大使を６年開催してきましたが、予算の関係で終了になりました。地域のことを学んだ子どもたちが、地域の良さは何かということを発表していました。小学校や中学校の学習指導要領の中に観光についての話があまりないので、授業の中ではなかなか観光についてやってもらえなくて、結局、地域の中のボランティアでやっていたことを発表していたのですが、どうしたら学校教育に入れるのか、ずっと考えながら実施していました。
今日のお話を聞いて、例えば、国語でやったことを国語で、社会でやったことを社会で、家庭科でやったことを家庭科で発表するのであれば、各学校で導入しやすいと思います。観光庁が主催で全国大会を開催すれば、授業も見られるし、子どもたちも発表できますし、各教科で分科会もできるので、こういうものが出来たら良いと思いました。

○立教大学・村上委員
以前、修学旅行後の教育をどうしたら良いかと聞かれた時に、何が面白かったかのオチをはっきりとさせて、オチに向かって経験を説明するようにすると、皆で発表した時にオチを競いあえるよと言ったら、国語の先生方が目からうろことおっしゃっていました。物語をどう作るかとい

うことが重要なので、国語は国語でやったことを発表するというのは良いかもしれません。

○品川女子学院・河合委員

経産省と内閣府で、地域経済分析システムを教育に普及しようという委員会が昨年度あり、そちらにも参加をしていました。全国で８名、高校の先生方ばかりだったのですが、様々な教科の先生方がいました。元々は政策アイデアコンテストという学校が窓口になって高校生が参加できるというものと、昨年は授業コンテストとして各授業で取り入れた内容をコンテストとして開催しました。そうしたところ、参加者がすごく増えました。総合学習だと学校全体でコンセンサスを図る必要がありますが、教科となると担当教員の意向で参加できるという動機づけにつながったと思いました。このようなことから、やはり、観光庁がイニシアチブを持って取組んでいく必要があると思います。

もう１つ、高校生向けの政策のアイデアコンテストの方なのですが、当初、窓口が学校だったので参加してくれる生徒が少なかったのですが、今年はコロナでやむを得ず、学生が直接応募する形にしたら応募数が倍に増えました。学校の先生方が興味示してくれなくても、興味を持っている高校生がたくさんいて、学校を介さなくて良いなら関わってみたい、やってみたいという学生が結構多いということが分かりました。学校を介さなくても良いということであれば、様々な学校で教材を作って、生徒たちが自由に見ることができ、生徒間の関わりから学校間の関わりにもつながると思いました。そのひとつとして、観光学習のキャンプのようなものがあっても良いのではないかと思いました。

○立教大学・村上委員

生徒が直接関わってはどうかという話があったのですが、マーケティング用語のカスタマージャーニーというのが欲しいです。生徒がどのように勉強していくのかという一連の流れを作っていくことが重要です。インターネットで物を買おうとしたときは、カスタマージャーニーがはっきりしているため、観光教育でもと思っています。カスタマージャーニーに合わせて、学校の観光教育を動かしていくということもできるかもしれません。学校は二の足踏むかもしれませんが、外部の専門機関に担ってもらえば良いと思います。

○観光庁・吉田

観光教育は、小中高の各レイヤーでどのような関わり方ができるかを考えていく必要があると思います。観光は関係する業種業態も多く、関り方という部分で関心を持ってもらえるポイントが多数あることもポイントだと思っています。そのポイントやエッセンスをどのように取り入れていくのかを観光庁としても考えていきたいと思います。また、ご意見いただいたものについて、検討を進められるものは、進めていきたいと思っています。

○岩倉高等学校・大日方委員

観光庁主催のツーリズムエキスポを活用していただきたいと思います。大きな箱で教員や学生が集まる場、発表できる場を提供いただきたいです。

○立教大学・村上委員

ありがとうございました。

【ブレイクアウトルーム③】

〇日本大学・宍戸委員

この分科会も含め、来年以降実際に推進していく上でどのような課題があるか、観光庁や国にやってもらいたいことや皆でやったらどうかといったお話をお聞きできればと思います。中谷先生、高清水先生、高嶋先生、鈴鹿先生の順番でお願いします。

〇北海道ニセコ高等学校・中谷氏

色々な先生の間で情報共有する機会の中で、コンテンツやツール、つながりを作る仕組みができたら良いと思っています。今後観光ビジネスは色々な所で入ってくると思いますし、地域を活用したネットワーク作りやプログラム作りをしていかなければならないと思っています。

今年は観光教育や実習がなかなかうまくできなかったという部分で観光産業は大きく変化するため、それに対応できるようなコンテンツ作りをしていかなければならないと思っています。北海道は遠いですが、Zoom など新たな仕組みもどんどん取り入れていけば良いのではないでしょうか。Zoom でも良いですが、今は難しいもののリアルでも色々な方々との交流、大学や中学の先生と話す機会がもっとできれば、様々な課題が解決されていくと感じています。

〇宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

小学校段階で進めて行くとなると、小学校 1 年生から観光教育と類似した学びはやっているため、そのあたりをどのようにさらに肉付けしていくかを考える必要があります。学校というのは新しい内容を取入れるのは拒否感があるので、そのあたりをどのように解決していくかが重要で、今ある内容のエッセンスを少し変えていく形にすると良いのではないかと考えています。1，2，3 年生は遠足がありますが、遠足は観光教育の 1 つの手段となるのではないかと思っています。自分の住んでいる場所から他方に足を向けていくのは、観光教育の橋ではないかと思っています。そのあたりをどのようにプラスして、中学年や高学年で広められるかを探っていく必要性があると思います。

さらに中学校に入ると、修学旅行で東京など中心地に行くため、まずは手短に広げていく必要性があると思いますし、今はつながっていないが神戸や徳島ともつながっていたので、そこに子どもたちが行った時の感動を見ていると、先ほど中谷先生がおっしゃったように他者とのネットワークが非常に重要だなと思っています。どこでどう小学校と異学年をつなげられるかという、私たちのスキルも必要になってくると感じています

〇法政大学国際高等学校・高嶋委員

観光教育に関わる中で、皆さんと一緒に仕事をしている中でも、顔見知りの方も多く、観光に

対して高い関心をもってお互いに努力しこんなこともしているのだというつながりが本当に素晴らしいと思っており、自分以外にも色々な取組みがあることが心強いです。

そして、観光庁さんとも連携することができる中で、観光教育の可能性を強く感じています。より幅広く観光教育を普及させるためには、関心をお持ちの方はもちろん、関心がない人や観光教育の概念がない人を引き込まなければならないと思っています。その時に、学校現場へは様々な実業界・産業界から様々な教育が提案されて、講師を派遣するなど産業界が自分のところに関心持ってもらおうと活動している中で、観光教育をより多くの人に伝えるにはどうしたら良いのか悩んでいるところです。

あまり具体的な解決にはなっていませんが、自分たちが面白がっていることを、皆に見てもらうという手があると思い、楽しんで観光教育に取組んでいることを紹介する方法が何かないかと考えています。ただ楽しんでいますといっても、見に来てはくれないため、学校の教育の現場において普及するためには、資料集のようなものがあっても良いのではないかと思っています。それにより、観光教育をまずは教科の中でも観光に関連が強い社会科に連携させることにもなるかと思います。普通科高等学校の社会科における観光の取り扱い、あるいは商業科における観光ビジネスにも関連づけた観光教育資料集のようなもので、各地域での観光活動の様子や世界遺産など、様々な資料を網羅しつつ、これらの資料を使ってこのような授業をしているということを、私たちのメンバーの中から実例として紹介することはできないでしょうか。まずは資料集で学校教育として取組んでいる方たちに発信し、興味を持ってもらえると面白いと思います。

〇徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

前向きな意見が出る中で、後ろ向きな意見で申し訳ないのですが、学校現場の現状を考えると皆仕事で追い詰められており、なかなか新しいことに取組んでくれない現状があります。特に商業科は観光ビジネスが教科として入ってくるため、良くも悪くも強制的に取組む環境になります。しかし、その他のところは、小学校、中学校、高校とも探究的な時間が今後増えるとはいえ、観光でなければいけないという縛りはないため、巻き込みたいのはやまやまですが、スムーズにはいかない状況があるのではないかと思います。

どうしたら良いのかを考えた時に、やはりモデル事例を出して、面白そうで効果があると見せる必要があると思います。モデル事例としては２つあり、1 つは突出した尖った事例、もう 1 つはどこでもできる普及型の事例、この 2 種類をきちんと示すことが必要だと思います。頑張ればこのようなこともできるのだという事例と今すぐにできる事例を示すことで、指導者を育成する土壌を作っていき、観光庁で文科省を巻き込んでもらい、各県の教育委員会が巻き込まれていけば、大きく普及していく気がします。

その中で例えば、中心的な普及をするところに対しては事業化や補助金などを含めやっていくことができると、強制的に前に進めていくことができると思います。

また、教材ツールの観点では映像や指導案、先生方が取組みやすい、応用がききやすいものが

良いというのもありますが、評価をどのように一体化させるか、コンピテンシー評価も各学校で必要だと思いますが、それに向かってルーブリック含めどのような評価ルールを作っていくか、この学びをするとこのような資質が成長するということをきちんと示すようなものがいるのかと思います。

ツールでいえば、昔ながらの教材は見てこうなんだねで終わってしまうものが多いですが、そうではなく、行ってココロが震えるような面白い仕掛けやツールがあると、子どもたちも飽きず、行ってみたいという気持ちも沸くので、そのようなツールがあると良いと思います。

ちなみに本校では、鳴門海峡の上に 360 度カメラを乗せたドローンを飛ばし、渦潮の上を飛べる VR 体験などをしており、そういったものは面白いのかなと思います。

ネットワーク作りについては、まずプラットフォームを整備してもらうことが重要だと思います。それができれば、人的、教材的なものも一括で相談・連携できる体制が作れるのではないか。

○日本大学・宍戸委員

以前、児童生徒向けの WEB サイトを作り実践事例を掲載したときに、教員が見る場所、生徒に見てもらう場所の２つを作ろうと考えていました（実現はしませんでしたが）。このような WEB サイトでの情報発信は非常に重要だと思いました。

優れた事例を広めるにあたり、鈴鹿先生にお聞きしたいのですが、経産省の未来の教室のようなイメージに近づくのでしょうか。例えば、長続きしているのかは分かりませんが、観光の事業化したケースなどを集約し、事業を発信していくときに事例を用意するなど、それに近良いメージで観光特化版という形になるのでしょうか。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

私のイメージするものはそれに近く、未来の教室をまるごと真似するわけではないですが、経産省の巻き込み方は上手いと思います。例えば、EdTech と STEAM で GIGA スクールに直結しており、GIGA スクールの方で整備をして、その中身を STEAM 教育で広めていこうということで、STEAM 教育は多くの県の教育大綱の中で謳われています。それが STEAM 教育だけではなく、観光教育も入っていくようなイメージになると、教育委員会としてもこれは PR していく取組みの一環という認識になっていくので、実際に広島県や奈良県では、教育長もそれに乗っかりその方向で中身の改革をしており、来年度は何校、再来年度は何校と広めていく計画を委員会として立てているため、そのようなやり方をすれば確実に広まるという印象を持っています。

○日本大学・宍戸委員

SPH などの文科省的なやり方は古いのでしょうか？学校に丸投げしているような感じがありますよね。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

丸投げでも良いと思います。中身をきれいに整理して、各学校で取組むときに、これは観光に特化した SPH ですという形でそれぞれ事例的なものも出てくると思いますし、文科省か観光庁かは別として、その段階でいったんフィルタリングで面白い事例が通るようになると思うので、実効性が伴えばやると思いますので、それもありだと思います。

○日本大学・宍戸委員

そこでモニタリングやチェックなど、業界や皆さんを巻き込んで経産省的なやり方を加味していくと良いのではないかと思いました。学校教育の中で既にあるものを上手く使っていくというのは、GIGA スクールなどトレンドをおさえていくのは上手なやり方で、観光的要素が既にあるとすると遠足とか修学旅行は少し古いような気がします。高清水先生は教育委員会の立場として、既にあるものなど、どこもが考えていくことを観光として上手く取組むなど、何かありますか。

○宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

学校現場では遠足や修学旅行は、過去から続いている単なる行事のイメージしかないところが多いため、そこに意味を持たせる必要性があると常々思っています。ただ近くに出向いて、こんなところがあるね、楽しかったねというのも、観光教育の一つのポイントになると思います。しかし、それだけで子どもたちは、何か感じ取ったのか学び取ったのかといえば、そうではない気がします。そこに行くためには、それなりの準備が必要で、私たちがどのように感じて、子どもたちに何を感じさせたいのかを抑える必要があると思っています。

現在、学校現場は疲弊している部分はありますが、その中でどう意味あるものに変化させるかというところが、古くて新しいということになってくるのかと思います。

私たちの使い方を広められるような、助けの場となるプラットフォームの必要性はかねがね考えていて、どこに相談したら良いのかなど、答えを返してくれる場所があると良いと思っています。

○北海道ニセコ高等学校・中谷氏

観光教育に取組んでいる例を見ると、コースや類型で実施しているところが多いと感じます。そのようなコースや類型に、ある程度大きな予算をかけて、事例を採っていくと　少ない人数で負担になってしまう懸念があると感じています。今回研究会をやって、2 校 3 校と集まって指定をかけ、まとめて予算にして動かすと、違いが分かって面白いのかなと思います。子どもたちにとってもまたやりたい、こういうことを知りたいと思ってもらうきっかけになるのではないでしょうか。

○観光庁・西川

皆様のお話を聞く中で、ネットワークづくりが大切と感じます。今回、第 3 回の分科会を合同で実施していますが、これも 1 つの走りになればと思っています。

さらに、文科省とは来年度以降、観光庁と一緒にやっていきたいと思っています。観光教育をご存じない方に対しては、皆様からお話があったように興味持っていただくきっかけや、わかりやすい柱を立てることで、観光庁として外に向かって発信していくことができればと考えています。

感想のような内容であり恐縮ですが、非常に有意義な議論をして頂きありがとうございます。

○日本大学・宍戸委員

学会などでも、高校の先生にも参加していただきたいと思っていますが、大学教員のように研究費などがなくて参加できないという現状があります。議論の場を幅広く作ることはやはり難しいことであるため、いろんな関係者を巻き込んで、広げていければ良いと思います。観光庁の HP でも 1 ページ掲載されているだけなので、2 年 3 年と取組みを継続し、充実させていけると良いです。

いろんな先生方が議論できるような場を設ける必要があります。コロナ禍でお金かけなくてもできる方法（Zoom）も身に着けたので、ハードルも下がりつつありますし、一方でもちろんリアル（対面）での場も重要となりますが、方法に関わらずネットワークを築く場が重要だと感じました。

モデル事例は効果的だと感じました。素晴らしい人目を惹く例と、どこでもできる事例を公開する Web サイトをどう構築していけるかが重要です。情報の集約場所を起点に、全部はできないかもしれませんが、まずはできることから始めていければと思います。

残り時間も少ないので、まとめを一言ずつお願いいたします。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

モデル事例について一つお話します。徳島県に「そらの郷」という体験型の修学旅行の受け入れなどを行う団体があります。これに、開成や巣鴨が参加しており、自身の高校も今年度参加する予定でしたが、コロナの影響で実現しませんでした。社会課題解決型の修学旅行を、都会の子どもと田舎の子どもが交流しながら実施するのは非常に面白い事例だと思っています。このような事例が、広がっていくと良いと思います。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員

様々な事例の共有は非常に重要だと思います。

普通科の教員の立場から言うと、学校の数としては普通科の学校が最も多いのですが、観光を意識している人が少ないため、取り組み事例が報告される機会が少ないのが悩みです。普通科に対して観光を伝えていく方法は今後の課題だと感じており、知恵を出し合って普及させていけれ

ばと思います。

○宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会･高清水委員

これまでは観光教育に対するイメージをあまり持っていませんでしたが、今回の分科会で観光教育に対する理解が深まりました。実際に自分がやってきたことを振り返ってみると、同じような考えを持つ人たちがいると思うので、どのように導入していくかという丁寧なやり方を続けていければ、観光教育は意味ある教育の 1 つになると思います。観光教育において、地元の中だけでなく全世界と繋がっていけることは、自分を高め、知見を広げる機会になるため、今後学校に戻っても広げていきたいと思います。

○北海道ニセコ高等学校・中谷氏

いろんな事例が各学校にたくさんあると思いますが、共有できる場所がないことが課題だと感じました。ニセコ町も SDGs 未来都市に認定されており、修学旅行に来る人が多いと思います。声かけずとも自然に集ることができ、情報交換が盛んにおこなわれると良いと思います。

○日本大学・宍戸委員

まずは同世代や同じグループで話す機会を設け、その後、縦にどう横断型にするかという両面が必要だと感じました。時間もありませんので、この後の共有の際に補足などして頂ければと思います。

【全体共有】

○玉川大学・寺本委員

教材ツールについては、一昨年、昨年とこの観光庁の事業でも少しずつ整備されつつありますが、大きな機運を上げていくためにいろんなイベントなどが必要になってくるのではないでしょうか。最も重要なのは観光協会や商工観光課と教育委員会との連携です。観光協会の方には、学生の観光を学ぶことに対するモチベーションを維持向上するために頑張っていただきたいと思っています。子どもたちを動かしていく上で何らかの推進費用、教員のファシリテーション能力が鍵となってきますので、教育委員会の頑張りと観光協会との連携が必要になります。

高校において、具体的には船員の人材育成、出口指導がポイントになってきており、魅力ある指導・仕事を紹介する事によって、専門高校では子どもたちにあこがれ感を抱かせているとのことであり､観光産業へ目を向けるきっかけづくりとともに､学ぶ場が必要との意見がありました。

商業高校の生徒・先生がシンクタンクのような形で動いて、商業高校同士や工業高校などの専門高校と横につなげていく上で、観光を一つの大きな網・窓口にしていくと、専門高校同士のつながりで面白い高等学校の動きができるのではないかという意見もありました。経済産業省のビ

ジネスコンクールなどもあるため、そのような機会を活用して生徒を動かしていく仕掛けや仕組みづくりが必要との意見がありました。

教科書や明確な教材がない中、観光教育は観光業に携わる人そのものが教材であるという非常に印象深い話がありました。観光業に携わっている人を前面に出していくと、「あのような人になりたい」、「あのような人の仕事に興味がある」ということで学んでくれるのではないかという意見がありました。

最後に、様々な教員等が有する観光に関する引出し、使えるコンテンツ、統計も含めてデータベースとして整備されると教員として教えやすいため、教員用のデータベースの整備などを進めてほしいとの意見がありました。

○立教大学・村上委員

我々の議論を踏まえると、寺本先生のお知恵を絶対に拝借したいと思いました。小学校では図書として小学生が読む観光の本が非常に少ないという話がありました。これは確かにそうです。大学生や社会人が読むような本はたくさん書きますが、小学校で使えるような観光の本のようなもの、以前、寺本先生が「こういう人が観光に関わっているという人と仕事」のようなものが全くないと仰っており、同様の意見がありました。また、授業開発のビデオ（授業をどうやって作ったら良いか）が欲しいと言っていました。

中高になると、教科で教員が分かれてくるため、教科ごとの観光への関わり方に対して、まず、何をどこで教えるのかということの調整が必要で、次に、教科ごとに観光を使って教えたことをどのように一般化するのかが重要です。例えば、国語科の全国大会のようなところで観光教育の話をどのようにしていくのかという意見があり、非常に重要だと思いました。学校の中の調整と、他校間で教科同士の調整が必要だということになります。

さらに、地域との調整の話はもちろん受容であり必要です。そして、様々なデータの活用が必要です。不思議なことに学校を介すと生徒たちは尻込みするところがあるため、自主的に学んでもらえるような仕掛けや仕組みが必要です。生徒たちの観光を学ぶときの学び方としてカスタマージャーニーをきちんと作って、それを観光教育へ反映させていくことが必要ではないかという意見がありました。

○日本大学・宍戸委員

私たちは、論点 2 の表を見ながら話をしました。1 つずつ議論したわけではないですが、大きく 3 つ程の問題意識や悩みや今後の必要性が出てきました。

まず、今回議論の場ができたことによって、現状や実情を知ることができました。今回参加されている方は大半が熱心に観光教育に取り組んでいる方ですが、全国の教員の中には観光教育に関心を持たれていない方も多くいると考えられることから、取組んでいる教員がどのようにネットワークづくりをして巻き込んでいくか、そのためにどのように周知していくのか、そのような悩みや意見共有ができる場をつくることが必要だろうという意見がありました。

高校専門学科のでは高校の観光系の集まりはあるが、なかなか広がらないという課題もあり、組織がどうなるかはさておき、このようなネットワークを小学校、中学校、普通科高校など、今

回議論になったような縦につながるような議論の場をどう継続していけるのかという話が出ました。そこに参画していただくことによって、新しい試みをする際に聞いたり、情報を共有したり、または、教材を活用する場が必要であり、それぞれの取組みを共有できるようなプラットフォーム（ウェブサイト）を構築するのも有効であるとの意見がありました。

モデル事例の創出が最も手っ取り早く、学校現場でいざ観光教育の魅力を議論していても、初めてそれをやってほしいとなったときに、手を上げづらいところがあります。優れた実践を見ることによって刺激を受けてやってみようとなります。2 つのパターンのモデル事業が必要で、ひとつは非常に素晴らしく先駆的な取組事例、もうひとつがどの学校でもすぐできるような分かりやすい取組み事例です。その中で事業費をつけて、ある程度実践的にしていかなければなりません。例えば、文科省でいえば商業系では SPH のようなものがありますが、これの観光版のようなものが必要かと思います。

経済産業省の未来の教室のようなやり方も、他を巻き込んでいく方法として非常に上手いと思います。観光教育の場合は地域、業界、その他たくさんの関係者を巻き込まなければなりません。たくさん関係者を巻き込んで事業化していくようなものをモデル事業として繰り返していくことで、観光教育のスキームが見えてくるのではないでしょうか。そして、プラットフォーム（ウェブサイト）や議論の場、ネットワークの中で広く周知していくことによって観光教育に取組んでいこうという学校も増えてくるのではないかとなりました。

③　全体討議

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

学校教育の中に入るとしたら総合授業だと思っていましたが、観光だからこそ全ての教科に関わることができ、様々な産業ともつながることができ、様々な教科とつながることができます。観光を主で授業を作るのではなくて、各教科の中で観光に関する授業を作ってもらい、そういった授業を集めた全国大会のようなものがあれば、みんなでシェアし合えて良いと思いました。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

学校で取組むということを考えると、プログラム・モデルを作ることは大事ですが、どの能力を伸ばしていくかを明示する必要があると思います。

○学校法人希望が丘学園　鳳凰高等学校・中村委員

教員のノウハウ、これまでの取組みから、それぞれがどのようなことをしてきたか教員間でもコミュニケーションを取り、材料を並べてそこから考えてみることもできると思いました。

○玉川大学・寺本委員

DMO や観光協会が地元の教育委員会と密接に協力している事例を知りませんか。

○徳島県立徳島商業高等学校・鈴鹿委員

徳島県では、今年度観光教育の会議が立ち上がっており、DMO が主体的にしているわけではないですが、県の観光課が音頭を取りながら DMO も参加しています。教育委員会ではなく、県の

観光部署が行っており、学校の先生、大学の先生も招聘されて会が立ち上がり、学びの仕組みを作ろうと取組んでいます。

○宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

商工会などは、学校に対して遠慮がちにはなりますが、つながりたいという要望があることが分かりました。どちらかからアクションをする必要があると感じました。教育委員会の絡み方について明言はできませんが、観光に関してつながりたいと思っている人がいることが分かりました。

○岩倉高等学校・大日方委員

この分科会の中にも全国高等学校観光教育研究協議会に参加しておられる先生方がいらっしゃいますが、協議会の先生で 1 年間教育委員会に出向され、ホテルで勤務されたという事例があります。このように、教員がインターンシップをする機会というのは少なく、教員が観光の現場を知ることでどういった着眼点を持つべきかを学ぶ機会が必要だと感じました。

○立教大学・村上委員

教育委員会は絡んでいませんが、長野県の湯田中温泉で八十二銀行が実施している「WAKUWAKU やまのうち」という地域活性化プログラムがあり、温泉街の再興をしています。その中で、小中学生に温泉街について学んでもらう授業を実施しており、通学路の旅館と子どもの交流が出来ています。このように、新しい事業を始める人が小学生や中学生と交流を持つことが、自分たちの町のビジネスとは何なのかを考える機会になっているということが、非常に良い事例だと感じました。

5. 議論のまとめ

○日本大学・宍戸委員

小中高のつながりを考えた時に、全体像や次の学びにどうつながるのかを意識する必要が根底にあると感じました。その中で縦のつながりが重要で、そのために何をする必要があるのかを考える必要があると感じました。

次に、ネットワークづくりが大きな課題だと感じました。高校の専門学科では、狭い世界ではあるがつながりがあるので、大事にしながら育てていくべきであります。一方で、小中では広く学ぶ機会があると良いと思います。観光を教えることも重要ですが、特に小中、普通科では観光「で」教えることも重要なので、他の教科における観光の教え方を事例として集めていければ、様々な教科の先生が関心を持つきっかけになるのではないでしょうか。

ネットワークづくりに関連して、情報の集積する場所の必要性も感じました。アクセスしやすいデータベース（Web サイト）が必要です。

地域がどう巻き込まれるかも重要ですが、一過性で終わらないように、継続するための組織作りが必要です。

教員の研修についても、先生に観光を教える意義を伝える機会があると良いです。先生方が大学で学んだり、企業で研修をしたり、モデル事業的なやり方でも良いので、そういった機会があるときっかけになると思います。

6. 閉会･事務連絡

○事務局・小森

2 月 17 日に第 2 回協議会がございます。分科会からの報告は宍戸先生にお願いしますが、出席される他の先生方からもフォローをお願いいたします。

3 月 13 日に予定しております、シンポジウムとワークショップにつきまして、現在観光庁と内容を詰めているところでございます。事前にご連絡させていただきますので、ご参加および周知にご協力賜れますと幸いでございます。

○観光庁・刀根

本日はお忙しいところお時間を頂き、また、様々ご意見を頂きありがとうございました。

本日、改めてプログラムやネットワークについて議論をさせていただくと、様々なご意見を伺うことができ、これらのご意見を基に議論を詰め、来年度に繋げていければと思います。

長時間にわたり、ありがとうございました。

○観光庁・吉田

本日は長時間にわたりご議論いただき、大変ありがとうございました。

話をお伺いする中で、観光とは幅広く、多岐にわたっており、様々な可能性があると感じております。その分、様々な活用・発展の仕方や興味のもたれ方があると思っております。観光庁として、行政のかかわり方にもご意見を頂くことができました。

先生方におかれましては、今後とも率先して観光教育に取組んでいただくとともに、観光庁としても皆様の取組みを参考としながら、和を広げ、取組んで参りたいと思います。

今後とも、語彙検討いただけましたら幸いでございます。本日は大変ありがとうございました。

○事務局・小森

分科会は、本日の第 3 回で終了させていただきます。後日議事録を送付させていただきますので、ご確認のほどよろしくお願いします。

これをもちまして分科会を終了とさせていただきます。本日は大変ありがとうございました。

以上